

アンジュー地方ラ・ソーレイ村地代帳の読解  
——ロブリエール家文書の解明に向けて——

金尾 健美\*

Lecture du Registre des cens de la Saullaye dans l'Anjou  
Vers l'Éclaircissement des Archives de Laubrière

Takemi KANAO

**Abstract**

La lecture précise d'un registre des cens de la Saullaye, village angevin dans le marquisat de Laubrière, nous permet d'illustrer plusieurs aspects de la société rurale au XV<sup>e</sup> siècle. C'était Olivier Portier, receveur des cens à partir de 1464, qui le faisait rédiger, marquait les articles et y ajoutait un bref commentaire d'après son inspection sur les recettes par son prédécesseur dans les années de 1450 à 1453, et encore le gardait pour y inscrire, mais sporadiquement, ses reçus des années 1470. Ce registre MS 17.5 dont le texte était triplé ainsi du point de vue chronologique a été parvenu et conservé dans Burt Franklin Collection d'Université Hitotsubashi à Tokyo.

Le registre nous informe, d'abord, de la paranté et du voisinage des paysans que reflète l'héritage de la terre. Ensuite, il prouve les cens variés qu'ils réglèrent à la mi-août et/ou au mois de mai ; le principe semble qu'un journal de terre, égal au travail cultivateur pour une douzaine de sillons, soit 12 deniers, mais se trouvent de nombreuses exceptions par le biais inconnu. Et finalement il suggère la disposition spatiale de terrains cultivés. Au bout de la plupart de terrains, passait le chemin de Plessi à Beaufort à proximité d'Anger. Cette description cependant signifie non que les terrains se soient serrés côté à côté en touchant de leur bout le bord du chemin, mais que le chemin était l'axe ou la frontière du village.

La conclusion paraît ambiguë ; la lecture des autres registres de la Saullaye nous aidera d'éclaircir les trois problèmes : la structure de l'héritage, le tableau des cens et la disposition spatiale, pour reconstruire la réalité d'un village angevin et caractériser la gestion des seigneuries de Laubrière.

Mots clefs: Saullaye, Laubrière, Anjou, cens, Moyen Age.

---

\*教授 西洋中世史

## 0. はじめに<sup>1</sup>

本稿が分析対象とするのは、フランス中西部に位置するアンジュー Anjou 地方（その中心地アンジェ Angers はパリから南西に約 250 km）の一村落、ラ・ソーレイ La Saullaye 村（アンジェ北東 20～30 km の間と推定）の 15 世紀の地代帳である<sup>2</sup>。この村落の起源はどれほど遡ることができるのか判然としないが、14 世紀（1370 年代）から 18 世紀までは同地方で侯 marquis を称したロブリエール家 Laubrière, L'Aubrière の所領であった<sup>3</sup>。このソーレイ村地代帳に限らず、ロブリエール家の所領経営に関する文書は今日に到るまで相当量が伝来している。その大半はメヌ・エ・ロワール Maine-et-Loire 県立公文書館（在アンジェ市）の大分類「私文書 Archives privées」の下位区分「個人および家族文書 Archives personnelles et familiales」に 34J の整理番号を与えられて収蔵されているが<sup>4</sup>、偶々、何らかの事情でその一部が流出し、アメリカの著名な古書収集家バート・フランクリン Burt Franklin（1903-1972）の手に落ち、彼のコレクションに加えられることになった。さらにそのフランクリン・コレクションは彼の死後、1974 年に一橋大学が三井グループの援助を得て獲得し<sup>5</sup>、現在に到るまで同大学社会科学古典資料センターが所蔵している<sup>6</sup>。

以下、本稿ではこのフランクリン・コレクションに収録された「ロブリエール家文書 Archives de Laubrière」に限定して論を進める<sup>7</sup>。ロブリエール家文書は 27 巻で構成されるが、簡易目録<sup>8</sup>ではこれを 5 グループに分け、(1) ソーレイ村の封土と領主地（1450-1725 年）11 巻 + 索引 2 巻。(2) 同村の区画整理（1481-1713 年）4 巻 + 索引 1 巻。(3) 同村の地代契約（1372-1730 年）2 巻。(4) 同村の 1724 年の地代帳 1 巻。(5) ブゾン Beuzon 城区（1580-1728 年）5 巻 + 索引 1 巻。としている。つまりソーレイ村に関する文書が 21 巻（うち索引 3 巻）、ブゾン城区に関する文書が 6 巻（うち索引 1 巻）という構成である。このうち、筆者が実際に閲覧し、写真版を作成し、分析を行ったのは MS17.5 という整理番号を振られ、(1) グループに分類された一冊である。この巻は大きく 2 部に分かれ、前半は 1450 年に始まる数年分の地代を記録した 22 枚の獣皮を中心に、記載人名などの一覧を前後に併録した部分から成り、後半は 1572 年から 10 年分ほどを記録した 34 枚の紙葉に、やはり同様の一覧を付した部分から成っている。本稿はこのうちの前半部分だけをとりあげた。27 巻に及ぶ文書の全容を解明するには容易ならざる覚悟が必要であり、それだけでも相当の時間とエネルギーを要すると思われる。しかも、早晚、アンジェの文書館に出張して、既述の 34J 群を参照し、検討する必要に迫られるであろう。根気強く、地道に分析を継続する必要がある。そのための手掛かりをいくつか提示すること、これが本稿執筆の動機であり、目的である。そこで、史料の概要を提示するために、欄外

の書き込みは収録しないという方針を立て、ともかく最初の4葉を校定し、項目に通し番号を付し、本稿末尾に収録した。

## 1. 史料の現況

その物的構成を簡単に説明すると、上記の冊子の前半部分は3部からなっている。まず1736年と明記された近代編纂者の手になる内表紙1葉、次に9葉（いずれも紙製）からなるロブリエール家の所領名をアルファベット順に並べ、それぞれにソーレイ村住人の関与の如何を示した一覧表があり、これを第1部とする。端正な書体で、関係する葉番号を指示する目次の役割を兼ねている。

続く第2部が地代帳の主要部分であり、獣皮全22葉（第8葉裏と第13葉裏は記載なし）からなり、最終葉の第22葉は天地が逆に綴じこまれている。各葉はかなり汚損していて、少なくとも1度、おそらく上記1736年に、原本を解体して補修が行われたと推測される。破損は薄紙を当てて丁寧に補修され、綴じ代には同種の紙葉、幅広の紙テープ、を当てて補強したうえで綴じ直しているが、この幅が数センチある補強紙テープが不透明であるために、表面左側余白の書き込みが隠れてしまった箇所がある。さらに、この解体補修を行った際に、全葉にわたって上部を数センチ裁断し、端切れは廃棄したと見受けられる。左右と下部に比べて、上部の余白はかなり狭い。しかも第10葉表、第16葉裏、第17葉裏、第19葉表の上縁に、下半分だけの文字列が残存していて、このような切断が行われたことを物語っている。ただし、いずれも本文ではなく、欄外余白の書き込みと察せられる。各記載の左余白には保有者の氏名が、また表面右上隅には算用数字で葉番号が記入されているが、いずれも近代書体であり、一覧を作成した人物と同一人物の手になると思われる。

第3部はこの巻に含まれる人名一覧で、5葉（最終葉は表のみ）からなる。記載順序は各人の姓（ないし贈り名）のアルファベット順である。もちろん第1部の9葉からなる一覧と同一人物の手になると判断される。この一覧も該当葉番号を併記し、索引としての機能を備えている。

第2部の主要部分22葉のインクはかなり薄れていて、判読困難な箇所もあるが、前後に併録された固有名詞の一覧を利用すると、その大半は読解可能である。使用言語はフランス語で、綴りは北方オイル語の流れを汲む一般的なものであり、綴りに若干の揺れが見られるが<sup>9</sup>、特殊な方言形は見られない。綴り省略法や連字 *ligature* も一般的である。ラテン語は使用されて

いない。後でも述べるが、この地代帳本文は先行する同種のものがあって、それを筆写したと推測される。直前の語句の重複や文の中断が散見されるからである。

地代帳本文の書き手はかなりの能筆と言えよう。しかし、この書体を1450年代の筆跡と理解するのは躊躇われる。一世代前、1420年代ではなかろうか。論者は長年ブルゴーニュ地方の財務・会計史料に親しんできた。その限りでの知見であるが、筆跡は時代とともに明瞭な変化を遂げる。1400年代までは書体は直立し、ほとんど傾いていない。それでいて、やや丸みを帯び、こぢんまりとまとまった書体という印象を受ける。それが1420年代に入ると、ゆっくりと傾斜を強め、「s」や「f」が上下に伸び、省略記号とともに、流麗な書体という印象を与えるようになる。ところが、この傾向は40年代になると度を強め、装飾的と表現したくなり、傾斜もきつく、上下左右に伸びる筆勢も煩わしく感じられる程になる。60年代、70年代になると、判読が困難なほど装飾的な傾向を示す。もちろんブルゴーニュはメヌ・アンジューからは遠く、人的交流も確認できないから、ブルゴーニュに生きた人々の書体傾向が当地にも妥当すると主張する根拠はない。したがって、ここでは当該史料に係わる作成年代には、やや注意を向ける必要があると述べるにとどめるが、気がかりな問題である。

## 2. 記載内容の概要

第1葉を見ると、パレオグラフィの専門家でなくとも、書体とインクの濃さが異なるテキスト、つまり一枚の葉に、異なる時期に、おそらく、別人の手で記入されたテキスト、が混在していることが容易に見て取れる。そこで、テキストの内容を理解し、この地代帳の成立事情を考察することから論を起こしていこうと思う。

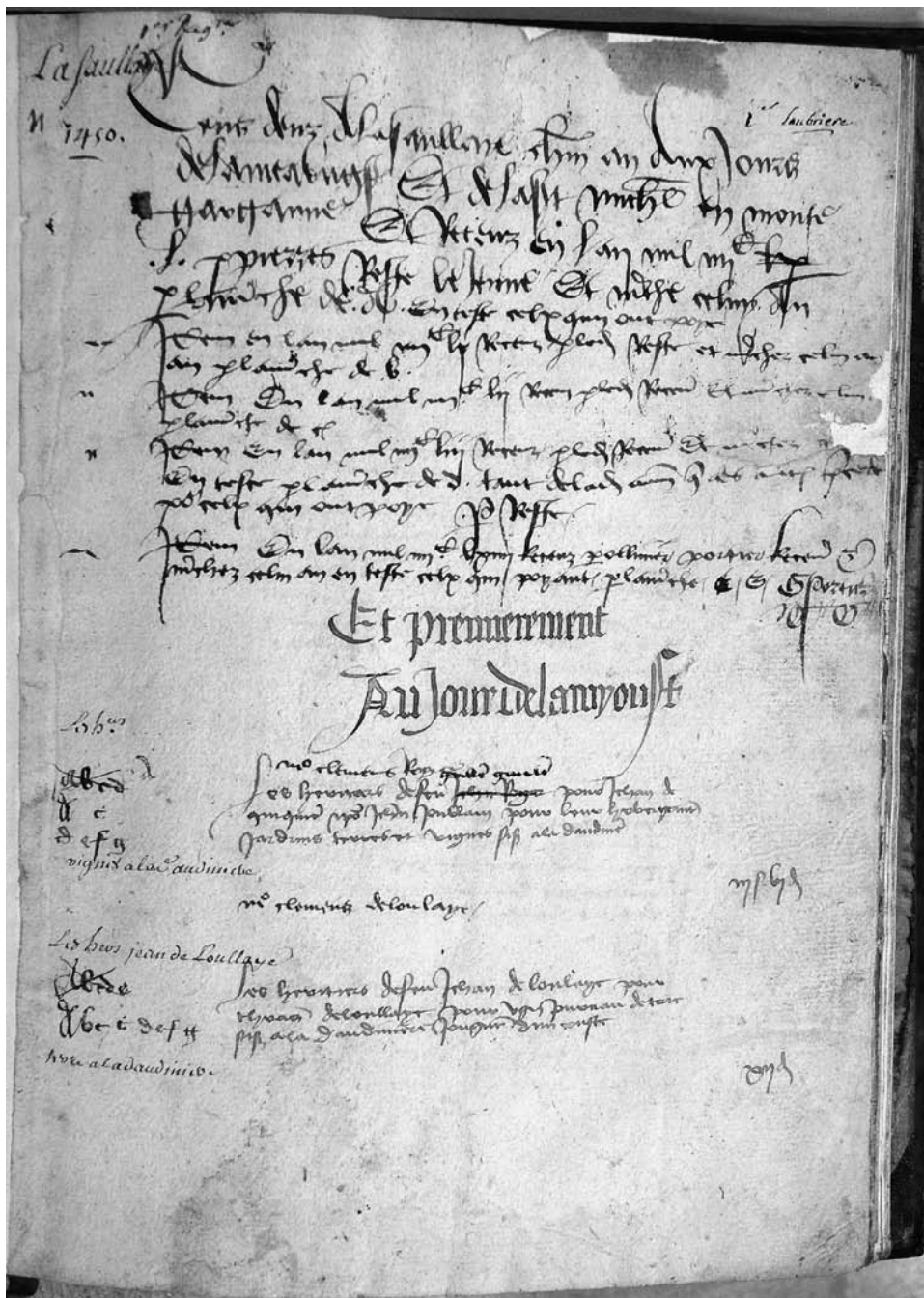
まず第1葉上半分を占める、かなり乱雑に書かれたように見えるテキストは何を伝えているか。この分量であれば、当然表題だけではない。それを読み解くことが最初の一步である。大意は次のように訳出することが出来る。

「ソーレイ村の地代。毎年、八月中日と聖ミシェル・モン・ガルガーヌの祝日<sup>10</sup>と2期に(分けて徴収する)。1450年はピエール・レスト・ル・ジュールによって徴収された。支払いを済ませた者たちには、この年はAで印をつけた。

1451年上記レストによって徴収され、この年はBで人々に印をつけた。

1452年上記徴収役によって徴収され、この年はCで人々に印をつけた。

1453年上記徴収役によって徴収され、先立つ年度と同様に支払いを済ませた人々にはこの



Burt Franklin Collection, Archives de Laubrière, MS17.5, f.1R°

年はDで印をつけた。

1464年徴収役オリヴィエ・ポルティエによって徴収され、この年に支払いを済ませた人々にはEで印をつけた。 (署名) O.ポルティエ」

この頭書から、3つの内容を読み取ることができる。第1に地代徴収の時期であるが、このソーレイ村では「八月中日と聖ミシェル・モン・ガルガーヌの祝日(5月8日)に」と記載されているから、年に2回あったことは明瞭なのだが、八月と五月に納期を設定した理由を考えておきたい。つまりこのラ・ソーレイ村では、秋の収穫を終えた直後に、という考え方は無縁であることを意味しているからである。この地方で何か独特の暦が使用されていたという訳ではなく、よく普及した復活祭に始まるユリウス暦が使用されていたはずである。15世紀後半のユリウス暦は3日の天文学的誤差を生じていたとされるが、農事暦として利用する限り、この程度の誤差が大きな問題となることはなかろう。

当該地代帳は第4葉表までが八月中旬を期日とする徴収の記録であり、第4葉裏から最終22葉までが聖ミシェル・モン・ガルガーヌを期日とする徴収の記録に当てられている。したがって記載者は復活祭に始まる単一年度内の第1回の徴収日が八月半ばで、第2回の徴収日は翌年五月上旬という認識を持っていたのだろう。これらの時期に地代徴収を行うことに決定した経緯は、正確には契約書を検討しなければ分からないが、穀物、特に小麦の収穫時期に対応していると理解するのが妥当であろう。春蒔きは同年の夏から秋にかけて収穫され、秋蒔きは翌年春に収穫される。つまり早春に播種し盛夏に収穫する場所では八月に地代を納め、これを第1回とし、秋蒔きの小麦を春に収穫する場所では翌年五月に地代を納付し、これを第2回とするという農作業の実際に対応する取り決めであったと推測される。ソーレイ村では、地代はすべて現金で、現物徴収の記録はないが、この納期設定は現物を納付した習慣の名残であるかもしれない。各納期に当てられた地代帳の葉数から見ても、また記録された徴収総額から見ても、少なくともこの帳簿に記載された年度に関して言えば、大半の農民は五月に地代を支払った。つまりこの土地では秋蒔きが主流であったと理解される。あるいは、当時の暦年(四月から四月)をそのまま1会計年度として、年間の農作業を終えた頃に、1年分の確定した労働果実に対して、翌年度の初めに当たる五月に地代を徴収すると考えることもできる。いずれにしても、穀物栽培を中心に考える限り、無理のない契約と思われる。しかしアンジューやメーンに限らず、フランスの多くの農村では、穀物栽培と並行してブドウを栽培し、醸造する。実際、当該地代帳でも多くの農民が耕地とともにブドウ畑を保有していることを明記している。ブドウの収穫と仕込みは九月で、市場で販売できるのは十一月以降であろう。この醸造収入は農家

の大切な現金収入になったと思われるが、当地では補助的であったのか、地代徴収期日を左右するほどには重視されなかったのであろう。

しかしながら、たった1冊の地代帳を見ただけで結論を下すのは早計であろう。偶々、この帳簿が記録する1450年以降の数期間は秋蒔きが主流で、春蒔きは少なかった、というだけかもしれない。一度決めた輪作区分を何年間も変更せず、毎年、寸分たがわず耕作を繰り返すという保証はない。八月徴収が大半を占める年度もあったかもしれない。ちなみに、地代を分割納付することが明記されているケースが3件あった。ジャン・ビッシェの寡婦は八月に8ドニエ、五月に12ドニエ（第21項）、ジャン・ル・ブーランジェ<sup>11</sup>は八月に3スー・9ドニエ、五月は7スー・6ドニエ（第23項）と、両者とも5月分の方が多い。しかしトマ・トゥノーは均分納で、各回7スー・6ドニエであった（第24項）。

この頭書から読み取れる第2の事実は地代徴収役である。1450年から53年までの4年間はピエール・レスト・ル・ジュヌが担当したことが読み取れる。その名前から、その父もピエールという名であったことは明瞭であるが、父の職務を継いだのか否かは判断できない。またロブリエール家とは直接に血縁を持つ人物とは思えない。徴収役 *receveur* と書かれているが、所領の差配を行う使用人であろうか。10年後の1464年、徴収担当者はオリヴィエ・ポルティエなる人物に代わった。彼は文末に署名をしているから、このポルティエこそ、この第1葉に頭書を書き込んだ人物と理解される。つまり第1葉上半分の頭書は1464年以降に記載されたと推測できる。

さて第3の内容になるが、各年度の地代を徴収した（支払った）者には年度順にA, B, C, …と記号を付けていく、という記述に注目したい。実際、各葉には3件から5件の記事が記載されるが、それらの記事の頭部ないし左側余白には、A, B, C, …が記入されている。「地代」と訳出した「*cens*」は長年にわたって金額が固定された地代を意味するから、1450年の収入も、51年の収入も、あるいはどの年度をとりあげても、すべて同一でなければならない。とすれば、毎年、同じ記載内容になることを承知の上で、全農民の土地保有状況の記事を筆写し、1冊の土地台帳を作成することの意味が問われることになろう。ある年度に作成した徴収記録を、翌年以降は確認すればよいのである。収入役は単に規定通りに支払いが行われたか否かを確認し、後日、自身が再確認できるような記号を付していけば十分、という簡略な管理方法が採用されたことを想像させる。

たとえば第1項では「故ギヨーム・ゴージェの相続人がドーディニエ（地名）のジャン・

キキエールとジャン・ジュランに代わって、住居、果樹園、耕地およびブドウ園のために3スー・6ドニエ」と記載され、その左側にはA, b, c, dと記入されている。それがバツ印で抹消され、その真下にA, c, d, e, f, gと記入されている。つまりこの記事はギヨーム・ゴートイエの相続人が、ドーディニエなる土地で行う各種の栽培のために、3スー半を課されていて、それを1450年以降、毎年支払ったことを意味しているが、記号dまで、つまり1453年まで支払い済みであったはずだが、その後、つまり54年から64年までの間に監査が実施されて、1451年分が未納であったことが確認された。そこで記号bが抹消され、改めて、その時点で確認された各年度の支払いに記号を付して判別を容易にした、ということであろう。第2項に関しては、やはりAからEまでの記入に一度バツ印を付して、書き直し、さらにFとGを加えているが、第1項のように抹消された記号はない。上段の抹消された記号と下段の記号を比較すると、大文字Aと小文字dの書き方が異なり、別人の手になるように見えるが、同一とも見え、いずれとも決めかねる。同一とすれば、確認作業を2度行ったことを意味している。下段の大文字Aは頭書のそれと酷似していて、この書き込みは頭書の書き手と同一人物、つまりポルティエ、の手になるように見えるが、頭書にはfやgの記号には言及がない。上段のA, …と下段のA, …を記入したのが別人であれ、同一人物であれ、それぞれ各行の文字列は揃っていて、文字間隔が一定であり、インクの濃淡にも大きな差が見られない。つまりA, b, c, …の記号としての意味が頭書の通りであるとしても、この地代帳を大切に保存しておいて、毎年、時期が来ると取り出して、地代の納付を確認し、ひとつ記号を書き込み、再び仕舞い込む。と、そうしたやり方を何年も続けたとは思えない。そうだとすれば、文字列がこのように整っているとは思えないからである。論者の観察が正しいとすれば、つまり文字列がある時期に、短時間のうちに記入されたとするなら、それは数年分の監査がある時に実施され、その結果を既存の地代帳の余白に記していったことを示唆しているからである。

上段と下段と、どちらの記号列もポルティエが記入したと仮定するなら、これ以上の分析はあまり意味がない。ピエール・レスト自身が1450年に地代帳の本文を記載したにせよ、彼がアシスタントに命じたにせよ、あるいはポルティエが監査の必要上、ピエール・レストの地代帳に直接記入することを嫌って、1464年にアシスタントに筆写を命じたにせよ、ともかく1450年代前半の土地保有状況を説明した地代帳が作成され、その余白にポルティエが2度に渡って監査メモを記入した、と理解することになる。1454年から63年までの10年間についての言及がないのは、その期間の記録には格別の問題がなく、監査が速やかに終了したためであると理解される。しかし、このように理解すると、本稿が分析対象としている冊子は地代帳というよりも、監査ノートと理解すべきであり、史料に対する認識を修正しなければならない。



しかし上段の記号列を記入したのはレストであり、その修正を下段に記載したのはポルティエであると仮定する場合、記号 A, b, c, …の記入は監査というよりも、記入そのものが地代徴収記録であると理解せざるを得ず、そうすると、地代帳の本文は一種の書式、フォーマットであり、それ自体はあまり意味がないということになる。さらに、この場合、文字列の観察から毎年記載されていないことを是認するなら、徴収役 *receveur* と呼ばれる人々が4～5年に1度、地代徴収を確認する程度の管理しかしていなかったということになり、さらには54年から63年まで空白の10年間の地代徴収に疑義が生じる。土地貴族にとって最重要と考えられる土地保有の現状確認と地代徴収がずいぶんと等閑視されていたことになり、俄かに認めがたい解釈と言える。

さらに注目すべき点は、数ヶ所にわたって左余白に1476年、77年、78年の3年分の徴収実績が記入されていることである。この筆跡は本文の筆跡とも、A, b, c, …のそれとも異なるように見える。ともかく、この「地代帳」のテキストには三つの時間が流れている。第1の時間は署名を遺したオリヴィエ・ポルティエが記入し、この史料の基本性格を決定づけるテキストや記号を書き込んだ時間、つまり1464年以降。第2はそのポルティエが検討対象としたピエール・レストのメタ・テキストで、1450年から53年の間もしくはその直後の時間を含みこんでいる。第3はポルティエが、おそらく自分自身のためのメモとして欄外に書き込んだサブ・テキストで、そこには1470年代半ばの時間が呼びこまれている。こうして本史料は1464年を基準時とし、前後に10年づつの幅を持つ多層化したテキストによって構成されている<sup>12</sup>。

### 3. 土地相続と現保有者<sup>13</sup>

各項目の記載内容に目を向けてみよう。数ヶ所にわたってメモ (*M°* = *memo*) が事後的に、従って、濃いインクで記入されている。第1項はすでに取り上げたが、「故ギヨーム・ゴートィエの相続人たちはジャン・ド・キクルとジャン・ジュランに代わって、ドーディニエールにある住居、果樹園、耕地およびブドウ畑のために、3スー・6ドニエを(支払う)。」と書かれているが、この項目の頭部に「メモ、クレマン・ロジェ」とやや小型の文字で記入されている。これは本文中の「相続人たち」(の一人)がクレマン・ロジェである、と注記したということであろうか。このようにメモ書きと本文の関係は必ずしも明瞭ではない。また訳出したように、「相続人たち」は記名された二人、すなわちジャン・ド・キクルとジャン・ジュラン、「のために」と記述されているが、両者の関係も、さらにはまたこの二人と故ギヨーム・ゴートィエとの関係も判然としない。なお第4項と第5項では、「～のために *pour*」と表現する代わりに、「～

に代わって *ou lieu de*」という表現を選んでいる。

続く第2項も同様で、「故ジャン・ド・ルーレイの相続人たちがトマ・ド・ルーレイのためにドーディニエールのある1日可耕地に対して、12ドニエを（支払う）」と訳出でき、相続人たちとトマ・ド・ルーレイの関係は不明である。以下、どの項目も記載方法は同様で、「X（人名）が、Y（人名）のために、Z（地名）にある耕地、ブドウ園、果樹園、住居（さまざまに広さを表現）のために、P（金額）を」という表現を淡々と繰り返す。このパターン化された記述の中のXとYとの関係が本史料からは読み取れない。

ちなみに、再びブルゴーニュに言及するが、旧会計院に保存されている地代や各種税の収入記録では、通常、収入勘定役を文の主語（動作主）と考え、「誰々から *De qui*、幾ら」、あるいは支出の記録であれば、「誰々に *A qui*、幾ら」と金銭授受の方向が明示されるように、氏名の直前に前置詞 *De*（～から）か、前置詞 *A*（～に）か、いずれかを必ず付記する記載方法をとった。しかし、このソーレイ村地代帳では、そのような配慮がやや不足しているように思われる。逆に言えば、このテキストは他人に提示して、了解を求めることを重視していないように思われる。

八月を地代の納期とした記録は合計で25件あるが<sup>14</sup>、そのうち現所有者が女性名になっているのは第20項のマリー1件のみ<sup>15</sup>。また寡婦とのみ記載され、人名を特定していない項目が第10項（ただし事後的記入のメモ）と第21項の2件である。この3件を除くと、他はすべて男性名である。また共同保有と理解される項目も散見される。第9項、第10項、第11項、第15項、第18項、および第19項であり、記載項目数の4分の1に相当する。このうち第10項が5名で最多であり、しかも例の後日メモを書き込んだ手によって、各人の負担が加筆されている。トマ・トゥノーが2スー・6ドニエ半、ジャン・ベケが4ドニエ、ペラン・ビオレが10ドニエ半、被相続人ジャン・ラ・プレクトの寡婦（負担なし?）、コラン・ピションが10ドニエ半であり、この項目の小計は4スー・7ドニエ半、と正確に計算されている。

第11項は3名分の記載であるが、そのうちギヨーム・フレールが半分を、アムラン・ル・ビゴとジャン・ソナースの二人で残り半分を負担すると記述されているが、項目小計が欠けている。左余白には1476年、77年、78年の書き込みがあり、いずれも20ドニエと読めるので、ギヨーム・フレールが10ドニエ、アムラン・ル・ビゴとジャン・ソナースがそれぞれ5ドニエであった、と断言したいところであるが、本文は1450年、ないしその前後の事情を述べるべく作成されたはずだから、四半世紀も後の徴収記録を同列に論じるのは無理である。件の3名がそのまま変わっていなかったという保証はない。このような共同保有ないし共同作業を行っていると思像される人々相互の関係も不分明である。

また現保有者の直近の被相続人を明示しているのは13件、ほぼ半分であった。先々代の保有者にまで遡及して言及した項目はない。また寡婦と明記された以外の相続人が被相続人とどのような関係を持つのか、不分明である。普通に考えれば親子、父と息子であろうが、そうと断言しにくい。姓が異なるからである。父から息子へ相続されたとすれば、彼らは普通の意味での姓は持たず、個人名（ないし洗礼名）+贈り名を持っていたことになる。もちろん、相続が親子とは異なるパターンであったのかもしれない<sup>16</sup>。この点に関しては、問題を提起するにとどめる。

#### 4. 土地利用・地代・集計

さて、本稿が分析対象としている史料が地代帳である以上、最も重要な情報は地代の額とその算出根拠、すなわち土地の種類と広さであろうが、記載方法は多様で、統一されていない（以下、本節の記述は末尾に付した一覧表を参照のこと）。

まず用語として、「土地 terre」を使用し、「畑、耕地 champs」は使用していない。もちろん、漠然とした土地 terre を意味しているわけではなく、穀物を栽培するための農耕地を意味していると思われるが、その広さの表示方法が実に多様である。「終日可耕地 un journal de terre」（1日の労働で耕作できる広さ）と表現されることが多く、こうした表現はソーレイ村がかなり長い歴史を持っていることを想像させる。また「四分地 quartier de terre」と「畝 sillon」、あるいは単に「一片地 une pièce de terre」という表現も散見されるが、この「一片地」は比較的広い土地を示す場合も、狭小な土地を示す場合（第21項）も、どちらもある。広い土地の場合は、それが「2日可耕地 deux journaux de terre からなる contenant」（第10項）、あるいは「4日可耕地からなる」（第18項）といった補足が付される。このような「終日地」や「四分地」「畝」には、もちろん複数や分数表現も見られ、「1日半の耕地 un journal & demi de terre」（第12項）もあれば、「11畝 11 sillons」といった半端な数（第14項）もある。第3項の「12畝」や第17項の「8畝」ならば、何らかの基本単位の倍数であろうと想像できるが、なかなか厄介である<sup>17</sup>。ともかく、単一の計測法に統一されていないが、保有する土地の広さ、ないしそれに基づく収穫量、を表現しているとみること自体は問題なからう。

次は「ブドウ畑 vigne」であるが、「vigne」という語に二重の意味を持たせ、文脈で使い分けているように思われる。典型的な事例が第6項だが、「四分ブドウ畑およそ2つ分からなる石垣で囲ったブドウ園1つに対して pour un clos de vigne contenant deux quartiers de vigne ou environ」と記載されている。この文に現れる2つの「vigne」は明らかに別々の意味を持つ

ている。第1の«vigne»は単に「ブドウ」ないし「ブドウ樹」の意味であろうし、この場合はフランスの農村なら、どこでも見られるように、低い石垣で囲ったブドウ園を指しているとして理解される。しかし第2の«vigne»は「(一定の広さの)ブドウ畑」の意味であろう。この15世紀のソーレイ村では、«vigne»という語で思い浮かべる畑のイメージがあって、その4分の1が栽培と収穫の単位面積だったのだろうか。

もう1点指摘したい。史料では「所有」や「保有」を明示していない。「誰それが、何々に対して(のために)」と表現されるだけである。上記のブドウ栽培の場合、「～に対して pour」は何を意味しているのだろうか。つまりソーレイ村に点在するブドウ畑ないしブドウ園は農民が畑そのものを保有し、管理を全面的に請け負い、最終的に収穫を換金して、それを納付するシステムになっていたのか。それとも領主たるロブリエール家が所有する広大なブドウ園があって、それがいくつかに区分され、農民は割り振られた担当地区で、誰かの監視下で、いわば賦役労働を行うのか。あるいは、その賦役労働を実際に行う代わりに金銭で代納したのか。あるいはまたその両者が混在していたのか、この記述だけでは判定できない。

第3に地代算定の対象となるのは森林 bois (第24項)と草地 pré (第25項)であるが、これらは1度ずつ言及されるだけで、草地は四分地を単位としている。さらに果樹園 jardin がしばしば言及されるが、これは広さを暗示する定量的な表現と結びついていない。住居 herbergement や家屋 maison も同様で、それらの有無だけが判断の基準であったと理解される。

各項目の記録を比較検討すると、1終日可耕地 = 2四分地 = 12畝 = 12ドニエ (= 1スー)が基準であり、この基準に様々な条件を加味して決定したと主張したい誘惑に駆られるが、例外が多すぎる。第8項の四分地は6ドニエ、第16項では同じ広さの四分地が12ドニエ、つまり2倍であり、第3項、第14項、第17項の畝はバラバラである。ブドウは品質が関係するのだろうが、第6項は1四分地で6ドニエであるのに、第15項は2四分地で6スー (= 72ドニエ)である。これをどのように比較すればよいのか。結論を急がずに、地代一覧表の作成は後日に譲ることにしよう。

25件の支払分布を概観すると、最低支払額は四分草地を地代徴収対象とされたマセが2ドニエ (第25項)、最高額は6日耕地と森林を保有するトマ・トゥノーが7スー・6ドニエ (第24項)であり、最頻値は12ドニエで7件あった<sup>18</sup>。第14項は「(地代)総額13ドニエで、うちアラルドーが7ドニエを支払い、ヴォダンが5ドニエ。そこで13ドニエ。」と、信じられないようなミスが修正もされずに放置されている。本稿で取り上げた4葉に限って言えば、計算ミスないし記載ミスと推測されるのは、これ1ヶ所だけであるが、第4葉表の最後に記載さ

れる総計は合わない。「ほぼ」正確だが、「ぴたり」ではない。45 スー・3 ドニエと一度書かれたものを、44 スー・5 ドニエと書き直し、10 ドニエ削減している。すでに説明した通り、第7項(3 ドニエ半)と第26項(6 ドニエ)は抹消されているから、この分を差引いて総額を修正したと考えるのが妥当であろうが、それならば、差額は9 ドニエ半となるはず。ドニエ未満を切り上げたとも考えられるが、計算ミスでなければ、詳細は不明である。既述のように第10項では、ドニエ未満まで正確に合算され、表記されていた。

通貨単位はトゥルノワと思われる。1ヶ所だけ、第18項に「フランスの« de France » 3スー・6 ドニエ」と記載されているが、これはパリジの意味であると推測されるからである。

## 5. 土地の配置

保有者ないし地代負担者を明記し、その土地の種類と広さを記述したのちに、その保有地がソーレイ村のどこに位置するのかが説明される。たとえば、第17項で、兄のギヨーム・ル・カミュの保有地の「一方の脇は故マセ・マニエの土地に隣接し、他方の脇はモーリス・シャトランの土地に隣接する。一方の端はプレッシからポーフォールに到る街道で区切られ、他方の端はギヨーム・フレールのブドウ畑で区切られる。」

脇 *côté* と端 *bout* という語を使用して地所の境界を示しているが、もちろん畝に平行に、つまり耕作作業を進めていく方向線に平行な土地境界線が「脇」であり、畝の両端が文字通り「端」であろう。このギヨームの土地に限らず、他にも第8項から第11項まで、第13項、および第23項の計6地所がプレッシとポーフォールを結ぶ街道を端として、そこから畝が直角に伸びる配置をとっている。しかし、すべての耕地がこのような配置になっているわけではなく、第12項の故エティエンヌ・フレールの土地はこの街道に脇で接し、ドーディニエとコロンを結ぶ別の街道と端を接している。つまりこの土地は街道の交差する角地であって、隣接する第13項のジャン・マイヤールの土地とは畝の方向が交錯する配置になっている。

ともかく、第12項と第13項の土地は、どちらもノデュープと呼ばれる場所にあり、隣接していたと推測されるが、他の土地は所在地が特定されていないものもあり、10を越える地区に散在していたと想像される。つまり地代帳の25項目を比較検討して、そこから隣接関係を推定することは簡単ではない。プレッシとポーフォールを結ぶ街道を中心軸としてその両側に、あるいはこの街道を境界線として、そこからどちらか一方に、耕地が広がっていくという単純な空間を形成していたわけではないようである。第15項にはソーレイ村通り *Rue de la Saullaye* で区切られた耕地も記載され、複数の道筋が交錯していたことを覗わせる。

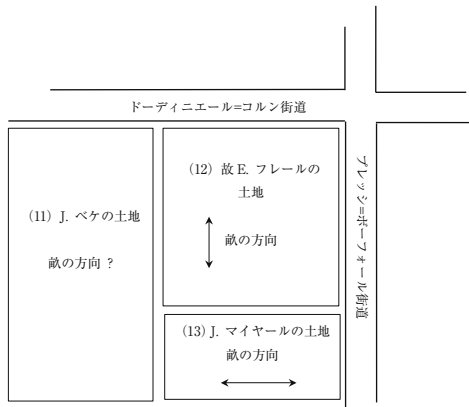


図 ソーレイ村の耕地

索引にはロブリエール家の所領として50を超える地名が記載され、その中のいくつかは村民が請け負う耕地がある。第1項、第2項、あるいは第14項に現れたドーディニエールはまさにそのような場所の一つである。しかし、そうすると、「ソーレイ村」とは集住地とその周辺の農耕地、と単純に理解することはできなくなる。もちろん徒歩圏内ではあろうが、散在する幾つかの地区を含む包摂的な空間であったと理解すべきであろうか。要するに、ソーレイ村の広がりや境界、あるいはそこに生きた農民の生活世界はどのようなものであったか、もう少し

データを収集し、分析を重ねなければ、現実はやや曖昧なままだろう。

## 6. おわりに

はじめに説明したように、本稿は史料を分析し、その結果に基づいて何かを主張しようとする論文ではなく、膨大な分量を誇る文書群を取り扱うための最初の切り口を示した緒論に過ぎない。したがって、断定的な結論めいた文章で締めくくることが差し控えたい。今後の展望ないし課題を示すことによって、ロブリエール家文書の研究が切り開くであろう新たな地平を希望的に述べるにとどめたいと思う。

第1に、ある土地で繰り広げられた世代を超える人的結合を再現することができる。明らかに親から子へと相続された場合も見られるが、そうとは思えない場合も散見され、加えて共同保有あるいは共同作業が行われていた事実も確認できる。それはどのような縁による繋がりであったか。是非とも解明すべき課題であろう。

次いで第2の課題は地代の合理性ないし一貫性の解明である。終日可耕地を基本とし、これを請け負う1世帯が支払う地代を12ドニエとする、でよいのか。ブドウ畑や果樹園はどのように算定するのか。もう少し明瞭に、地代一覧表という形でまとめてみたい。

最後に第3の課題として、ある時点でのソーレイ村を空間的に再現する可能性を挙げておきたい。村民が請け負う土地を地図上に正確にプロットすることはできないかもしれないが、それぞれの耕地の相対的な位置関係ないし隣接関係を提示することは可能であろう。またソーレ

イ村の居住空間は農耕地が点在する空間的広がり「内に」あるのか。それとも集住と耕地の配置は別々の原理に基づいていて、直接には関係しないと考え、あえて両者を関係させる必要はないとするのか。おそらく様々な事情の結果として1450年なり、64年なり、それぞれの時点での空間配置があるのだろうが、その緩やかな変化のプロセスを追跡することは当該農村世界の再現という視点からすれば、決して無意味ではないだろう。

こうしてソーレイ村の時空を再現することができれば、次の課題はブゾン城区の分析である。同様の分析を積み重ねて、この城区の現実を再現したのちには、ソーレイ村とブゾン城区の関係を考察することになろう。

フランクリン・コレクションに収録されたロブリエール家文書の分析はここで終わるが、ロブリエール家所領の研究は終わらない。アンジューの古文書館には34Jの整理番号を与えられた46箱と136冊が眠っている。フランクリン・コレクションの27巻は34Jの一部分という理解でよいのか。両者の補完関係を確定することは必須の作業である。その際、言わばロブリエール家文書の「外側から」、全く異なる視点を導入することが必要になろう。ロブリエール家がアンジュー伯領内の土地貴族として、第3アンジュー伯家とどのような関係にあったか、それを財務行政の面から検討することを忘れてはならない。アンジュー会計院は、おそらくアンジュー伯諮問会の一部門として、1370年代に活動を始め、1442年に自立したものの、その後、何度か吸収合併と分離を繰り返す。初代会計院総裁アラン・ルケー Alain Lequeu は1450年に死去。第2代ギヨーム・ゴクラン Guillaume Gauquelin が1464年に死去すると、この総裁職は廃止された。67年には復活するが、以後、80年代まで目まぐるしく廃止と復活を繰り返す<sup>19</sup>。1450年と1464年。この会計院の存立にかかわる年号と本稿で検討した地代帳の書き込み年が一致するのは偶然だろうか。手元の史料では、この問いに即答できない。

このような地道な分析と考察を根気よく続けることによって、ロブリエール家の所領経営を再現し、それをフランス中西部の一貴族として位置づけ、評価することができるだろうが、その考察結果はどのような視角から見た時に一般的であり、またどのような視角から見た時に特異と判断できるのか。周辺の他の所領経営の研究を渉猟することによって、初めてこの問いに答えることができるだろう。

研究の見通しはこのようなものである。何年かかるのか。一人の研究者に残された時間とエネルギーには限界がある。

Registre des cens à la Saullaye, Burt Franklin Collection MS17.5 fos.1R°-4R°.

dans le Centre pour la littérature historique des sciences sociales (The Center for Historical Social Science Literature) d'Université Hitotsubashi à Tokyo.

Notice

1. Les mots entre [ ] indiquent ceux inscrits ultérieurement par une autre main.
2. Les mots mis en italique signifient la lecture incertaine.
3. « --- » indique les lettres indéchiffrables.
4. Les articles sont numérotés par l'éditeur.

(f.1R°)

[ Cens deuz a la Saullaye, chacun an aux jours de la me-aougst et de la Saint Michel en Monte Garganne<sup>20</sup>. Et receuz en l'an 1450 par Pierres Reste le Jeune. Et merche celuy an par la merche<sup>21</sup> de A en ceste celx qui ont payé.

Item en l'an 1451, receuz par ledit Reste et merchez celui a an pour la merche de B.

Item du l'an 1452, receuz par ledit receveur et merchez celui pour la merche de C.

Item en l'an 1453, receuz par ledit receveur et merchez et en ceste par la merche de D tant de ladite annee que comme aux precedents pour celx qui ont payé.

Item en l'an 1464, receuz par Reste par Ollivier Portier receveur et merchez celui an en ceste celx qui payant par la merche de E. O. Portier. ]

Et Premierement

Au Jour de la my-oust

(1) [ M° Clemens Rogier ]

Les heritiers de feu Jehan Rogier [ Guillaume Gautier ] pour Jehan de Quiquere & pour Jehan Joullain pour leur herbergement, jardins, terres et vignes sis a la Daudiniere, 3s. 6d.



[ M° Clemens de Loulaye ]

- (2) Les heritiers de feu Jehan de Loulaye pour Thomas de Loullaye pour vgn<sup>22</sup> journau de terre sise à la Daudiniere jongnant d'un couste<sup>23</sup> 12d.

(f.1V° )

- (3) Clemens Morice, l<sup>o</sup><sup>24</sup> d'Estienne Le Boulengier pour douze seillons de terre sise pres *l'Estresche* aux clercs jongnant d'un couste a la terre feu Jehan de Loullaye & d'autre couste a la terre feu Perrin Auffray. Item la *no-ctre-jud* d'une Saullaye & deux Noyers qui sont en la terre dudit de Loullaye. 12d.

- (4) [ Modo Joullain & Jehan les chastillons ]

Morice chasteillon, ou lieu de Pierre Joullain & de Jehan chasteillon, pour *L'erau* Auchart sis pres la *Moun* contenans ugn journau de terre ou environ avec les jardins jongnant d'un couste au chemin comme l'en vait detorne a Briencon & d'autre couste<sup>25</sup> 12d.

- (5) [ M° Guillaume des Forges *acane*<sup>26</sup> de sa femme faire de feu Maurice Mannier qui est herité eu temps de *soi desseder* ]

James le Besson

~~Guillaume Raguier~~

acane de leur femmes, fille de feu Mace Mannier qui est ou lieu de Jehan le Roy pour une piece de terre sises a la Grineliere jongnant d'un couste a la terre Guillaume des Forges & d'autre couste a ugn cloux de vigne cy apres déclaré appartenant aux dessusdits et aux chouses Guillaume Freere ; aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait de l'oustel Joullain a Corne<sup>27</sup> 6d.

- (6) [ M° Mace Roger & Mace le Besson Michieu -- nyers Machurin -- te-It ]

Item les dessus dits pour ledit feu Mace Mannier pour ugn cloux de vigne contenant deux quartiers de vigne ou environ sis pres la meson feu Pierrot Joullain jongnant d'un couste et aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait de ladite meson a Corne & d'autre couste a la terre Hamelin Lebigot. 12d. obole.

- (7) Ledit James Le Besson pour Le Bouge d'une meson avec les deux *arpentilz*<sup>28</sup> de ladite meson en la meson de Hamelin Le Bigot jongnant la meson dudit Bigot avec l'*agnarte*<sup>29</sup> partie par Jude de l'appartenance entier et yssue dudit herbergement jongnant d'un couste a la vigne Guillaume des Forges laquelle vigne est comprinse ou declarée *deseses p--chouse*<sup>30</sup>.

3d. obole.

(f.2R°)

- (8) [ M° Mace Lebesoy, --- Roger ]

Ledit James Le Besson pour feu Mace Mannier pour vgn quartier de terre sise pres la croix feu Mace Dube jongnant d'un couste à la terre Collin Pichon et d'autre couste ; et aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait du Plessi au Gumont a Boffort, 6d.

- (9) Thomas Thouesnaut [ 12d. ]

Jehan Becquet [ 12d. ] pour Jehan Grollay pour une piece de terre sise d'avec la Mornier contenant vgn journau ou environ jongnant des deux coustes aux terres dudit Thomas ; aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait du Plessi au Gramaire a Beaufort d'autre bout au clou de la Morinie, 2s.

- (10) Thomas Thouesnaut [ 2s 6d obole ]

[ Jehan Becquet 4d ]

Perrin Brocter [ 10d obole ]

M° La femme heritiere

Colin Pichon [ 10d obole ]

pour feu Jehan la Brecte pour une piece de terre sise pres la Biectionnerie contenant deux journaux de terre jongnant d'un couste à la terre James Le Besson et d'autre couste à la terre feu Pierre Joullain ; aboutent d'un bout à la plente Jehan des Moulins & d'autre bout aux cloux pastures Alardeau, vgn chemin entre deux.

(10a) Item vgn journal de terre sise pres la Morinier jongnant d'un couste a la terre Jehan Petit Perot et d'autre couste a la terre Jehan Becquet ; aboutent d'un bout au chemin au chemin<sup>31</sup> comme l'en vait du Plessi a Beaufort & d'autre bout a la terre *Clemens* Channeau.

4s. 7d. obole

- (11) [ Modo Mace Dany & Thienot Freere par moictie de terre Thomas Jouet payé 3d. sur la somme de Dany ]

Guillaume Freere, pour la moictie  
 Hamelin Lebigot }  
 Jehan Sonace, } pour l'autre moictie } heritiers de feu Estienne Freere pour vgn  
 herbergement cortil<sup>32</sup> et appartenant sis pres l'oustel feu Perot Joullain avec deux quartier  
 & demy de vigne et demy journau de terre en vgn tenent jongnant des deux coustes ; &  
 aboutent d'un bout aux aux<sup>33</sup> terres feu Mace Mannier & d'autre bout au chemin comme  
 l'en vait du Plessaire au grant --- a Beaufort.

(f.2V°)

- (12) Item ugn journau & demy de terre ou environ sis a la Croix Naudube jongnant d'un couste  
 audit chemin & d'autre couste a la terre Jehan Becquet ; aboutent d'un bout au chemin  
 comme l'en vait de la Daudiniere a Corne & d'autre bout a la terre Jehan Maillart pour,  
 pour ledit Becquet, terre & vigne et aussi pour lesdits journau & devoye de terre.

3s 10d obole.

- (13) Jehan Maillart pour Michel Maillart pour ugn journau de terre sise a la Croix Naudube  
 jongnant d'un couste a la terre des heritiers de feu Estienne Freere et d'autre couste a la  
 terre feu Clemens Destrache aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait du Plessaire a  
 Beaufort & d'autre bout a la terre Jehan Becquet. 12d.

- (14) Jehamin Vodin 1° de feu Mace Mannier pour [ 11 seillons mestre Jehan Alardeau de terre  
 sise a Grezillon joignant d'une part au chemin par lequel hom va de Beaufort au Plessi au  
 Gremont & d'autre part la terre dudit Alardeau aboutent d'un bout au chemin par lequel  
 hom va d'*Estriche* a la Daudiniere, 13d. de laquelle somme ledit Allardeau paye 7d. et ledit  
 Vodin 5d. et pour ce ] 13d<sup>34</sup>.

- (15) Georges Touesnault }  
 Jamet Touesnault }  
 Guillaume Mytaine } pour les heritiers feu Alain Mace pour deux quartiers de vigne sis au

*Mourisiere* de la Saullaye qui furent feu Jehan Roger jongnant d'un couste aux terres des Barannes de la Saullaye & d'autre couste aux vignes Mace Le Gentilhomme *acane* de *saf-t-jadis saint f-je-ch-de-melot*; aboutent d'un bout au chemin de la Rue de la Saullaye et d'autre bout aux murgiers dudit lieu de la Saullaye. 6s.

(f.3R°)

(16) [ M° Jehan Beguin de la Trische ]

Guillaume Beguin, pour vgn quartier de terre sise a la Daudiniere jongnant d'un couste a la terre Clemens Morice & d'autre couste au chemin alent d'Estriche a Sarrigne; aboutent d'un bout [ au chemin par lequel hom va de courne a Sarignie et d'autre bout a la terre Clemens de Trische ] 12d.

(17) [ Perin Le Camus ]

Guillaume Le Camus l'esné, pour la femme et hoire feu Jehan Lagogne, pour huit seillons de terre sise a la Broce Greslee jongnant d'un couste a la terre feu Mace Mannier & d'autre couste a la terre Morice Chasteillon; aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait du Plessairs a Beaufort & d'autre bout a la vigne Guillaume Freere, 6d.

(18) M°

Pierre Bichot  
Jehan Bichot  
Raoull Botereau ]

Jehan Roger

La femme & heritiere feu Jehan Bichet ] pour une piece de terre contenant quatre journaux de terre ou environ sise au Noyer feu Morneau jongnant d'un couste<sup>35</sup> de france 3s 6d.

(19) Thomas Touesnault

Colin Pichon

les enfens Perrin Biociez ] pour une piece de terre sise a la Moriniere<sup>36</sup>.

(20) [ Memo Marie la Boulangere 10d. obole. D'autre Phorien Thoesnault paye 3d. Item ledit

Thoesnault pour Roger 10d. obole. Item pour Botherau 10d. obole. ]<sup>37</sup>

(f.3V<sup>o</sup>)

(21) La femme et hoirs feu Jehan [ Bichet ] pour une piece de terre sise pres les jardins de la meson de Bourneuf jongnant d'un couste a la terre Jehan Maillart et d'autre couste auxdits jardins ; aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait de L'Aixe Anger et d'autre bout au chemin comme l'en vait d'Engers a Beaufort a cest feste huit deniers et a la fest Saint Michel douze deniers, pour ce, 8d.

(22) Guillaume des Forges *acane* de sa femme, jadis femme de feu Mace Mannier, Janne le Besson & Guillaume Raguine, heritiers *acane* de leur femme dudit feu Mace Mannier pour une piece de terre sis a la Groye jongnant d'un couste et aboutent d'un bout a la terre Mace le Gentilhomme et d'autre couste a la terre<sup>38</sup> d'autre bout au chemin comme l'en vait de Farigne a Corne, 12d.

(23) Jehan le Boullenger pour Estienne Gaultier pour une piece de terre sise a Loullaye jongnant d'un couste a la terre mestre Jehan Alardeau et d'autre couste a l'ousche feu Guillaume Richaye et a la vigne et evis<sup>39</sup> de Loullaye ; aboutent d'un bout au chemin comme l'en vait de Plessi a Beaufort & d'autre bout a la terre Jehan Maillart et aux destrichez dont il en est deu a ceste feste et a la feste de Saint Michel Monte Garganne sept seolx six deniers, pour ce, a ceste feste 3 s 9d.

(f.4R<sup>o</sup>)

(24) Thomas Touesnault pour six journaux de terre et vgn ci<sup>40</sup> peut de boys sis au lieu appellé le Verger jongnant d'un couste a la terre du cure de corne et d'autre couste a la terre feu Forian la Gogue ; aboutent d'un bout au cloux de Grunebault vgn chemin entre deux & d'autre bout au cloux de Rymon dont il en est deu a ceste feste 7s. 6d. et a la feste St. Michel 7s. 6d. pour ce 7s. 6d.

(25) Mace Le gentilhomme pour vgn quartier de pre sis entre le pre de mestre Jehan Genestier d'une part et le pre Jehan de Touscheroude et autre part aboutent d'un bout au pre feu

Jehan Bichet.

[ 2d. ]

- (26) [ Perrin le Camus pour la femme & hoire<sup>41</sup> feu Jehan la Gogue pour huit seillons de terre sise pres la Broce Greslee le chemin entre deux, jongnant d'un couste a la terre aux heritiers feu Mace Mannyer & d'autre couste a la terre Morice Chasteillon ; aboutent d'un bout au chemin par lequel l'en vait du Plessi a Beaufort & d'autre bout a la vigne a Hamelin le Bigot, 6d<sup>42</sup>. ]

- (27) Somme 44s. 5d.<sup>43</sup>

### 注

1. 本稿は日本学術振興会 科学研究費助成金（挑戦的萌芽研究）研究代表者 大月康弘（一橋大学・経済研究科・教授）「ロブリエール家文書を取り巻く世界—フランス貴族所領経営と領主文書の謎を解く—」課題番号 24652150（2013-2015 年度）の研究分担者として実施した研究にもとづく最初の成果である。
2. ソーレイ村のおよその所在地は本文中に記載した通りであるが、その正確な位置と革命中・革命後の帰趨については未調査。また当該ソーレイ村以外のロブリエール家の所領に関しては、地代帳の索引から地名のみ知ることができるが、その詳細についても今回は調査を見送った。
3. ロブリエール家に関する家系研究は僅かに 1 点のみである。De LAUNAY, Contrard ; Essai généalogique sur la maison le Febvre de Laubrière d'après son dossier aux Archives du Maine-et-Loire, *Revue historique de l'Ouest*, 1893 pp.351-364, 1894 pp.118-125, et pp.150-159. 著者 De Launay は Maine-et-Loire 県立公文書館 E3079 および E3090 に依拠し、1325 年付の結婚証書を遺した Guillaume le Febvre を Laubrière 家の最古の人物とし、その子孫が 16 世紀にブルターニュからアンジューにかけて勢力を拡大した、としている。17 世紀のカッシーニの地図ではラヴァルとアンジェのちょうど中間に Laubrière の名が見える。それゆえ、当初はメーヌの貴族と理解していたが、アンジューの辺境の貴族と理解することにした。なおアンジュー伯第 3 家系との関係も未調査である。
4. Laubrière と Saullaye のクロス検索を行った結果、Archives Portal Europe のサイト情報によって、34J なる整理番号が振られた Fonds de la baronnie de Briançon et du marquisat de l'Aubrière なる文書群 Fonds が Arch. Dép. de Maine-et-Loire に収録されていることが判明した。さらに、この文書群は 46 箱 cartons の文書葉と 136 冊の冊子 registres で構成され、そのすべてが当 M.-et-L. 公文書館で編集され、1988 年に刊行された 25 ページの目録に記載されているという。しかし当 M.-et-L. 文書館のオン・ライン目録にはこの 34J とその目録は未収録で、こうした情報を確認することはできなかった。しかし「個人および家族文書」の分類を見ると、1 桁から 3 桁の数字とアルファベット J を組み合わせた整理番号がすでに相当数収録されているので、おそらくオン・ライン目録には現時点では未収録なのだろうが、件の 34J なる整理番号が確かに存在し、この分類に含まれるのだろうと推測することができる。以上がネットで調査できる限界であろう。専修大学附属図書館はフランス各地の県立公文書館目録

(冊子)を良く揃えているが、OPACで検索した限りでは、上記のMaine-et-Loireの目録inventairesは系列Eの補遺と系列Hしか所蔵していない。ちなみに旧メヌ地方はマイエンヌMayenne県(県庁所在地ラヴァルLaval)とサルトSarthe県(同ル・マンLe Mans)に分かれたが、いずれの公文書館でも、オン・ライン検索を行った範囲ではロブリエール家の痕跡を発見できなかった。しかし、ないという確証を得たわけでもない。いずれはこれら3館での現地調査が必要となろう。

MATHIEU, Isabelle; *Les Justices seigneuriales en Anjou et dans le Maine à la fin du Moyen Age*, Rennes, 2011は本稿とはかなり異なる関心の下にまとめられた一書であるが、34Jを利用した箇所がある。

5. この経緯については、細谷新治「パート・フランクリン文庫の調査の思い出」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』1(1981) pp.2-6.に詳しい。
6. フランクリン・コレクションの暫定的なカタログは同センターによって1978年に刊行された。
7. 筆者がロブリエール家文書を知ったのは全くの偶然である。2011年、所属先の川村学園女子大学から3ヶ月の短期国内研修の機会を与えられ、近代以前の貨幣論を調査すべく、一橋大学に日参していた。客員研究員として遇され、同大学の古典資料センターを頻繁に利用していたため、知己となった司書に何かの折に教えられたと記憶する。調査の協力を申し出てから瞬く間に月日は流れ、今日に到った。
8. 一橋大学・社会科学古典資料センターのホーム・ページで閲覧できる。
9. 例えば、動詞joindreの現在分詞・標準形はjoignantであろうが、jongnantが頻出する。しかし中世後期のテキストでは、鼻子音[j]の表記が-ngn-となるのはさほど珍しいことではない。むしろ疑問に思うのは«ugn»である。文脈上、数詞ないし不定冠詞の«un»であることは確実と思われるが、記載者の個人的な癖か。「ung」であれば、中世後期から近世にかけてのテキストには頻出する。女性形は標準的な«une»で見れるので、記載者が不定冠詞男性形は鼻母音化していない、すなわち[un]に近いと認識しているのかもしれない。不詳。
10. イタリア南部、アドリア海に面したフォッジアFoggia地方にあるガルガーノGargano山に、492年、聖ミシェル(大天使ミカエル)が出現したという故事にちなむ。5月8日をその祝日とする。
11. 以下、本稿では保有民と地名の原綴りを本文には挿入しない。項目番号を利用して、末尾の校訂版と一覧表を参照されたい。
12. 本史料MS17.5の後半部分は16世紀の地代帳であるが、本稿が扱う前半部分に比べて、さらに欄外・行間の書き込みが多くなり、どこまでが当初の本文で、どの部分が後日の書き込みか、判読困難な箇所が多々ある。
13. 以下、第5節まで、本稿では八月納期分を記載した4葉に分析を集中する。
14. 八月徴収分の記載件数は26件であるが、第17項と第26項は同一内容で、後者は抹消されているので、本文は25項目とする。
15. 第20項は下部の余白に事後的に記入されたメモであり、本文を構成する項目ではないようにも見える。
16. «l°»という略記法が第3項と第14項と、2カ所に出現する。「使用人«l'homme»」であろうか。不詳。なお筆写人は«l'on»ではなく、常に«l'en»と綴っている。また第14項と第16項では«on»の替わりに«hom»と綴っている。いずれも古期・中期フランス語では珍しい事例ではない。
17. «seillon»は「畝」という具体的・即物的な意味だけでなく、1/5 arpentという面積計測単位の意味も持つ。ちょうど«tonneau»という語が「樽」の意味も、液体を計量する単位の意味も、どちらも持ち合わせている、ということと同じであろう。
18. 以下の第14項の13ドニエを12ドニエの間違いと理解して7件とした。
19. LE MENE, Michel; La Chambre des Comptes d'Anjou et les libéralités princières. dans *La France des*

*principautés. La chambre des comptes XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles. Colloque tenu aux Archives départementales de l'Allier, à Moulins-Yzeure, les 6, 7 et 8 avril 1995. Sous la direction de Philippe Contamine et Olivier Mattéoni, Paris, 1996. pp.43-54. 著者 Le Mene は BEAUTEMPS-BEAUPRE, C.J. ; Coutumes et Institutions de l'Anjou et du Maine antérieures au XVI<sup>e</sup> siècle. 4 vols. Paris, 1877-1883. に依拠して論じている。*

20. Le 8 mai.
21. au sens de « marque ».
22. compris pour « un ».
23. Le texte est interrompu.
24. Inconnu. Un sigle pour « l'homme » ?
25. Le texte est interrompu.
26. Inconnu. Une variante d'« acense < acenser » ?
27. Interrompu.
28. Inconnu.
29. Inconnu.
30. Cet article est rayé
31. « au chemin » est répété.
32. jardin.
33. « aux » est répété.
34. Une erreur de « 12 deniers » ?
35. Le texte est interrompu.
36. Cet article est rayé.
37. Cet article est mis dans la basse marge.
38. Un espace est laissé pour quelques mots.
39. terrain marécageux.
40. Plutôt « si » ?
41. ou « heritière »
42. Cet article est rayé ; un double de l'article 17.
43. Après rayé 45s 3d.



表 Cens de la Saullaye

Article	Tenanciers	Localite	terre	vigne	autres	cens (s.) (d)	N. B.
1	Heritiers de Guillaume Gautier	Daudiniere				3 6	
2	Heritiers de Jehan Loullaye	Daudiniere	1 journal			12	
3	Clemens Morice	Etresche	12 sillons			12	
4	Morice Chastellain	Moun	1 journal		jardin	12	
5	James le Besson	Grinceliere	1 piece			6	
6	James le Besson	près dela maison de feu Prierot Joullain		2 quartiers		12	
7	James le Besson	dans le terrain de Hamelin le Bigot			maison et 2 arpenants	3 1/2	
8	James le Besson	près de la croix de feu Mace Dube	1 quartier			6	
9	Jehan Becquet	Mornier	1 journal			2	corrigé pour 12d ?
10	Thomas Thousesnault, Jehan Becquet, Perrin Brocter, femme heritiere de Jehan la Brecte, Colin Pichon	Biectonnenie	2 journaux			- -	ensemble des articles 10 et 10a
10a	Thomas Thousesnault, Jehan Becquet, Perrin Brocter, la femme heritiere de Jehan la Brecte, Colin Pichon	Mornier	1 journal			4	T.T. 2s 6d 1/2, J.B. 4d. P.B. 10d 1/2, fem. ? Et C.P. 10d 1/2.
11	Guillaume Freere, Hamelin Lebigot, Jehan Sonace	près de l'hôtel de feu Perot Joullain	1/2 journal	2 1/2 quartiers		- -	ensemble des articles 11 et 12
12	Guillaume Freere, Hamelin Lebigot, Jehan Sonace	Naudube	1 1/2 journal			3	10 1/2
13	Jehan Maillart	Naudube	1 journal			12	
14	Jehamin Vodin	Grezzillon	11 sillons			13	mi-août et St.Mich.mt.G.
15	George Tousesnault, James Tousesnault, Guillaume Myaïne	Mourisiere de la Saullaye		2 quartiers		6	
16	Guillaume Beguin	Daudiniere	1 quartier			12	
17	Guillaume le Carnus	Broce Greslee	8 sillons			6	
18	Pierre Bichot, Jehan Bichot, Raoul Botereau, Jehan Roger	Noyer	4 journaux			3 6	de france ( = parisis ? )
19	Thomas Thousesnault, Colin Pichon, et enfants de Perrin Biociez	Moriniere					article rayé
20	Marie de Boulangere, Phorien Thousesnault	-	-	-			M.B. 10d, P.T. 3d + 10d 1/2 + 10d 1/2.
21	La femme de Jehan Bichet	Boumeuf			jardin	8	
22	Guillaume des Forges	Groye	1 piece			12	
23	Jehan le Boulenger	Loullaye	1 piece			3 9	mi-août et St.Mich.mt.G.
24	Thomas Thousesnault	Vérger	6 journaux		1 bois	7 6	mi-août et St.Mich.mt.G.
25	Mace le Gentilhomme	entre le pré de Jehan Genestier et de Jehan de Tousesnault			1 quart de pré	2	